

## 纏足とハイヒール

吉岡郁夫\*

### 1 纏足は特異な習俗か

中国には古来、女性の足を人工的に小さくする纏足（Tと略す）の習俗があったことは、日本でもよく知られている。この習俗は漢民族の間に広く根強く定着し、近年になってようやく頽れた。一般には、この習俗が中国以外で行われたことがないという理由で、世界的に特異なものとする傾向がある。たしかに中国のみで行われ、一部で模倣されたことはあるが、本来は漢民族固有の習俗であって、割礼や去勢のように、多くの国々や民族が行ったことはない。

しかし、Tの行われた地域的な広がりや女性人口を考えると、西欧全域に匹敵するとみてよいだろう。これだけ広い地域にTが普及したことは驚くべきことである。Tを奇習ととらえることは妥当ではない。

中国では、Tから天足（自然の足）への過渡期の清末に、長沙の名妓沈桂喜は纏足靴のヒールに目をつけ、そのころ欧州から入り始めたハイヒール（Hと略す）に履き替えた。それが語り伝えられて大流行したといわれる（岡本1986, p. 196）。魯迅はTを追放した女性たちがHを履いているのを見て、Hは新しいTだと批判した。アメリカでもかつて「アメリカ人にはTはいらない」というスローガンのもとに、H排斥運動が起こったことがあった。

TとHとが似ていることを説いた人は少なくないと思うが、両者を学問的に比較した文献は少なく、私の参照し得たものは金関（1976, p. 302）のエッセイぐらいである。Hの前身は16世紀ごろ、ベネチアの舞台女優が履いたゾコリといわれているが、この履物は底全体が高くな

※日本民俗学会会員

っている。ヒールだけが低い靴はルイ王朝時代に宮廷から始まったといわれる。Hを欧米の習俗とすれば、TとHとの比較も比較民俗学のテーマとして取り上げてよいだろう。

### 2 姿勢と歩容

ここで足の骨の名称を使わなければならないが、Tの形態学的変化を述べるのが目的ではないので、図1で理解していただきたい。

Hを履いたときの姿勢は爪先立ちの状態であるから、体全体の重心は足の前方にかかる。ヒールが高くなるに従って、踵にかかる体重は足

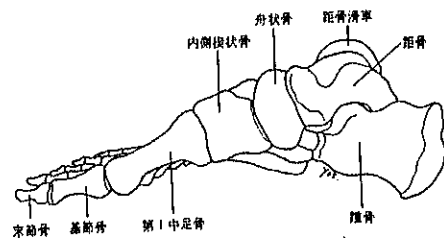
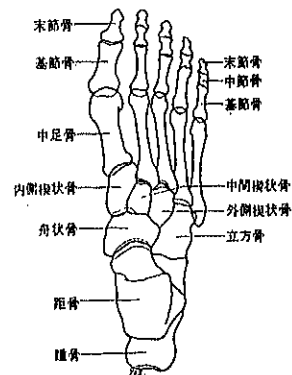


図1 足の骨 上：右内側面 下：右背側面

前部の主に第1中足骨頭（親指のつけ根）にかかってくる。このような姿勢では、腰椎の前弯（前方凸の弯曲）が強くなる。

この姿勢を横から見ると、膝が伸びていて、上体がそのままでは体が前に傾くので、ヒップを後ろに突き出し、胸を前に張り出して重心のバランスをとる。それによってウエストがくびれ、また、腰をかがめて歩くことができないから、姿勢がよく見える。しかし、これは強制された姿勢であるから、体にとっては必ずしもよい姿勢とはいえない。

Tの直立姿勢もこれとよく似ていることは、金関（1976, p. 303）が指摘している。Tの姿勢は股関節を軽く外転し（体の中心より外側方に出す）、股関節を伸ばしている。そして、左右の踵を離し、爪先は60°以上の角度で開いている。TではHと同様接地面積が小さいが、Hよりも靴の前後径が短いので、左右の踵をくっつけた“気をつけ”の姿勢ができず、左右の足を開くか、片足を前に出して体を支えていたという。

脊椎はTと同じように（笠間1940, p. 140,

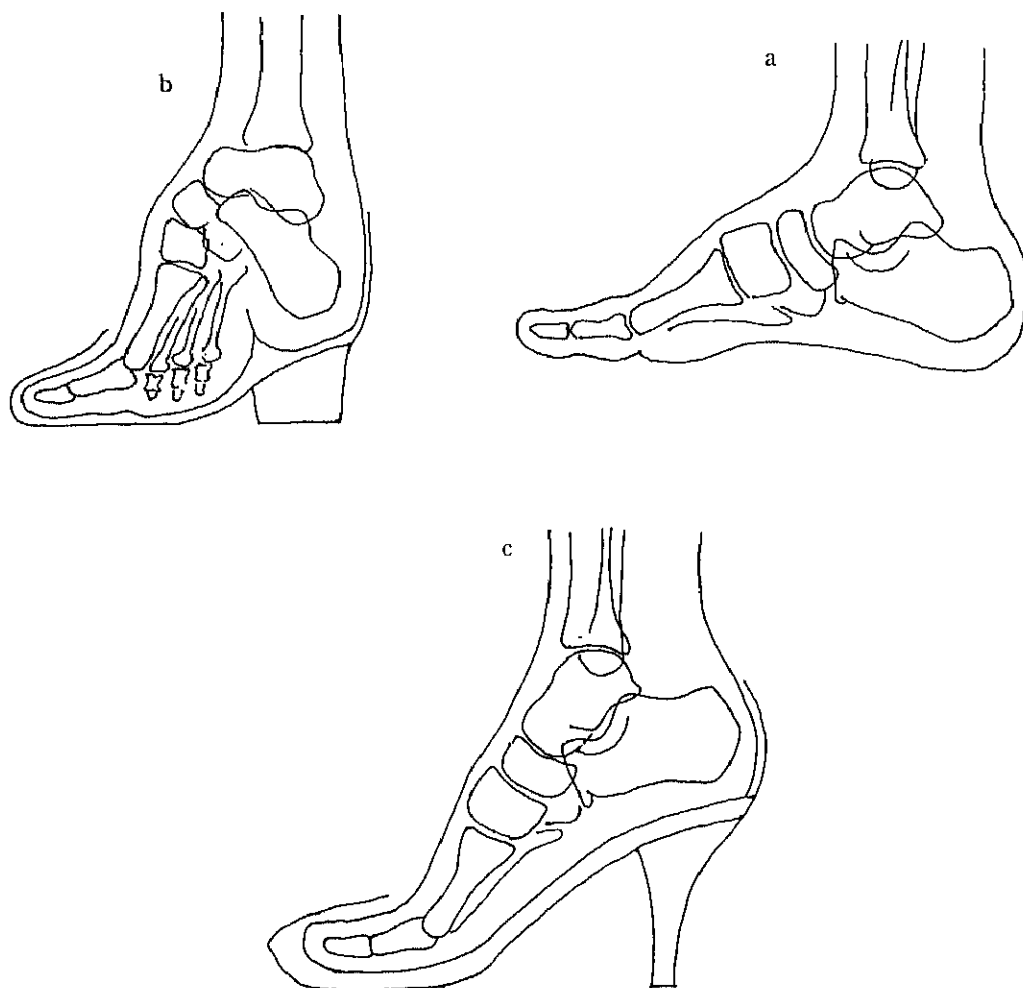


図2 足のX線像（右） a 正常 b 纏足 c ハイヒール

桃崎1943, p. 1307), Hでも腰椎の強い前弯を示す。腰椎前弯が強くなると、椎骨後方の椎間関節に体重がかかり、腰筋や殿筋の緊張を伴うので、腰痛の原因となる。

Hを履いた足のX線写真を見ると、指のつけ根で強く背屈し、足底のアーチ（土踏まず）が高くなり、アーチの頂点にある舟状骨は著しく持ち上げられる。上から見ると、ヒール高が高くなるにつれて、爪先の部分が圧迫され、ついには外反母指の状態になるまで幅が狭くなる。

TのX線像については多くの報告があり、典型的なTではほぼ一定している（Hasebe1912, 高木・斉藤1926, 桑野1936, 本間1937, Ono1941, 笠間1940, 桃崎1943）。詳しい所見はここでは必要でないで、簡単に記す。

骨の変形が最も著しいのは踵骨である。その長軸は天足では水平に近いが、Tではほとんど垂直に近くなり、踵の部分がHのヒールのようにになり、踵の後面で接地している。距骨は距骨頭（足関節の関節面）が著しく拳上し、その長軸は水平になっている。舟状骨は上前方に突出して、足背（足の甲）の頂点に位置する。3個の楔状骨も変位している。中足骨は第1中足骨を除き、骨が非常に繊細になり、そのために両端が強く膨大したように見える。指骨も第1指（親指）以外は変形し、発育は不良で、とくに末節骨は著しい。MP関節（指のつけ根）はほとんど脱臼している。

T女性の歩行を報告からまとめてみると、次のようになる（角田1905, p. 63, Plossら1935, p. 268, 笠間1940, p.140, 桃崎1943, p.1307, 中野1944, p.994）。T女性は立っているだけでも上体が揺れ動くほどであるから、歩くときもふらついて倒れやすい。一部の女性は杖を使うか、付添いの腕に寄りかかって歩く。何人かの女性は子供のように、召使いに背負われて運ばれた。H.Virchowが問診した女性は、だれも見ていないときには、四つんばいになってはっていたほどであった（Plossら1935, p.268）。他方、下層階級の女性は歩くのになれているので、足

を交互に出すのがうまく、跳ぶような歩調で歩いたという。

一般の歩調は両下肢を左右に外転・外旋し、膝と足の関節はあまり動かさず、ほとんど股関節と腰だけで体のバランスをとる。そして、前かがみで上体を左右に振りながら、きわめて小さい歩幅で楚々として“運歩”する。

Tをした女性は疲れると、腰痛を訴える。最も多い部位は下部腰椎の両側で、殿筋、腰筋の疲労によると説明されている。また、左右の仙腸関節（骨盤後部）にもしばしば痛みを訴え、激しい圧痛点（指圧で痛みを訴える点）が証明されるケースもあるという（平山1927, p.131）。

一方、H歩行については、種々の医学的検査が行われているが、ここではT歩行との比較に必要なことだけに限定したい。H歩行では多くの研究者が認めているように、体の上下動の少ないすり足歩行である。

普通の歩行では、指のつけ根を背屈し、次にそれを伸ばして地面を蹴り、推進力にしている。Hを履くと、すでに起立しているだけで指が背屈しているのだから、それ以上曲げることがむずかしくなっている。そこで、踵や爪先の振幅の少ないすり足歩行になる。これは足が地面に着いている間、体重は踵だけでなく足底全体にかかる。次には、踵に次いで足前部のほとんど同時に地面に着き、爪先部の内側（靴のボール部）で蹴り出しが行われる。すなわち、Hを履くと、足は内側縁が接地して外側縁が地面から離れる（回内）傾向を示すことが多い。この不安定な状態をカバーするために、足関節、下腿、膝、股関節、骨盤、腰椎にまで過度の緊張を強いることになる。実際にHを履いたことのある数名の女性に聞いてみると、腓がひどく疲れ、長時間立っていると大腿後面が痛くなるという。

T歩行について、今では検査をすることはできないし、筋電図を使ったデータもないが、おそらくH歩行と共通するところが少なくないと思われる。Tでは膝と足をあまり動かさないので、もし左右動がなければ、すり足に近くなる

のではないだろうか。H歩行の筋電図では、腓腹筋（腓の筋）を接地期、離地期の別なく使っている（Kondo1960, p.250, 鈴木1976, p55）、疲れると腓が痛くなる。それはこの筋が足関節を動かさないように固定しているからである。Hでは足関節を軽く曲げた位置に固定するため、筋電図では大腿後内側の筋が強く作用することが認められる。これも大腿後側が疲れるという訴えと一致しているし、Tでもおそらく同様であろう。

### 3 足とフェティシズム

中国でTが起り、およそ800年にわたって続いたのは、それがセックスと結びついていたからだといわれている。中国の男性が女性の足に執着していたのは事実であろうが、それは中国だけではない。

ヨーロッパでは、古くから足は生命と繁殖力のシンボルであり、多産のシンボルとされてきた。それに多くの性的観念が結びついて、足（下肢）は性の座と考えられてきた。例えば、ラテン語のfemina（女性）はfemur（大腿）からきている。18世紀ごろから、breast（乳房）とleg（脚）は異性の前で口にしてはならない語となった。

15世紀末からスカートの丈が短くなり始め、20世紀に入るとますます短くなり、やがてナイロンストッキングが普及したので、女性は脚線美を強調するようになった。Hもそれと関連して広く使われるようになった。こうなると、男性のなかには、足そのものを性愛の対象とするものが現れてきた。一種の性倒錯である。このように、相手の身体の一部や身に着いているものが性愛の対象になることをフェティシズムといい、フェティシズムの対象となるものをフェティッシュという。

Wulffen (1958, p.241) は、裸足に関する足フェティシズムはまれで、多くは履物を履いた足に関係し、「非常に広範囲に広がっている」靴フェティシズムに移行するという。そして

「われわれはここで、西洋においては成人女性のおおわれた脚は、男性にとってはしばしば生理的な崇拜物をなして、……衣服の下に、美しい形のふくらはぎ、さらに恐らくは沢山の飾りのついた靴下を見る場合には、男性は容易に非常な興奮状態に置かれるということを思い出して欲しい」といっている。

大足を嫌い小足を好むという中国古来の、足に対する執着は足フェティシズムから発したものであろう。足フェティシズムは女性の足を男性性器のシンボルとしてみるものであって、Tとは異なるという考え方（池沢1982, p.196）もあるが、これほどまでの足に対する執着は足フェティシズム以外の何物でもない。

しかし、Tはフェティシズム以外の要素を含んでいることも事実であろう。人工的に足の奇形を作り出して、その立居ふるまいから歩き方まで鑑賞するというのは、動作においても女性美を求めるものであった。Tの普及には儒学が大いに預っているが、儒教がT発生の原因ではない。1893年、シカゴではじめて催された足のコンクールでの優勝者は、足の長さが19.5cmしかなかったという。女性に小さい足を求める潜在的関心は中国だけのものではない。HもTと同様、足を小さく見せるものである。魯迅のH批判やアメリカでのH排斥運動でいわれたように、Hは現代のTという言葉はこの問題の本質を衝いている。足を小さく見せるだけでは物足らず、実際に小さい足を作り出したのがTである。

Tをした女性が起立して身体を支えるためには、殿部を後方に突き出してバランスをとらなければならないことはすでに述べた。金関(1976, p.304)は、この姿勢は解剖学的にvaginaの筋の収縮を来すと述べている。この姿勢はHを履いたときにも生じる。H歩行やT歩行では、足をあおることができないので、歩幅が小さくなり、腰に力を入れ腰を小さくひねって歩く。それによって、大腿と殿部の筋をよけいに使わなければならなくなり、大腿や殿部

がよく発達し、さらに女性性器の発達を促す、という俗説がある。これは医学的に証明されていないにもかかわらず、これを信じている人は少なくないようである。

Plossら(1935, p.269)も述べているように、T女性のヌード写真を見ても大腿や殿部がとくに発達しているようには見えず、正常の場合と変りはない。それにもかかわらず、Tが下半身を発達させると説く人が多いのは、中国では民俗知識としてそう信じられていたのではないだろうか。Tでは歩行が著しく阻害されるので、下肢筋の発達が弱く、相対的に骨盤が大きく見えたのかも知れない。日本人研究者の報告には、骨盤の計測をしたものが多い。これはTが骨盤の発達を促すかどうかを確かめる目的で行われたらしいが、はっきりした結果は得られていない。下肢骨は運動が制限されるので、華奢になることが、金関とその門下によって報告されている(金関・王1949, 頼1959)。

#### 4 むすび

纏足とハイヒールとを比較して、その類似点について述べ、中国とヨーロッパの女性の足に対する関心にも共通したものがあることを考察した。纏足は足フェティシズムと関連があり、纏足は下半身を発達させる、というかくれた民俗知識によって根強く継続したのではなかろうか。両者の最も相違する点は、ハイヒールが下肢を露出して脚線美を強調し、見せるためのものであるのに対し、纏足は足をかくして他人の眼に触れさせなかったことであろう。とはいえ、足の性的魅力を強調するという点では、両者とも軌を一にしているといえよう。

#### 引用文献

van Gulik, R. H. "Sexual life in ancient China : A preliminary survey of Chinese sex and society from ca.1500 BC till 1644 AD" 1961 (松平いを子訳『古代中国の性生活—先史から明代まで』284-291頁, せりか書房, 1988)

Hasebe, Kotondo "Der verkrüppelte Fuss der Chinesinnen" "Zeitschrift für Morphologie und Anthropologie" Bd. 14, S. 453-494, 1912.

平山 達「纏足ト其ノ骨盤トニ就テ」『日本整形外科学会雑誌』2巻1号, 130-131頁, 1927.

本間念峰「支那婦人の纏足」『医界展望』153号, 29頁, 1937.

池沢康郎「身体のエステティック ひすとりあ・こるほれあ」190-197頁, ポーラ文化研究所, 1982.

金関丈夫『木馬と石牛』302-306頁, 角川書店, 1976.

金関丈夫・王 耀文「福建系台湾纏足婦人骨格ノ骨学的研究 2 下肢骨」『国立台湾大学解剖学研究室論文集』9冊, 119-138頁, 1949.

笠間亥九郎「支那婦人纏足レ線解剖学的研究」『名古屋医学会雑誌』51巻1号, 137-184頁, 1940.

勝屋弘辰・桃崎文雄・山田政信「纏足者の生体測定成績」『日本整形外科学会雑誌』17巻4・5・6号415-419頁, 1942.

Kondo, Shiro "Anthropological study on human posture and locomotion" "Journal of Faculty of Science, Univ. of Tokyo" Ser. V, vol. 5, No. 2, Pt. 2, pp. 189-260, 1960.

桑野鉄四郎「支那婦人纏足骨のレントゲンの研究」『実践医学』6巻6号, 519-522頁, 1936.

頼 伸仁「福建系漢族纏足婦人骨格の骨学的研究 3 大腿骨及び骨盤」『人類学研究』6巻2号, 650-716頁, 1959.

Miltner, 1936 (中野1944, p. 993より引用)

桃崎文雄「纏足ノ研究 1 纏足者ノ足部形態ニ就テ」『熊本医学会雑誌』19巻8号, 1302-1317頁, 1943.

中野 操「纏足の医学」『医譚』17号, 981-995頁, 1944.

岡本隆三『纏足物語』東方書店, 1986.

Ono, Naoji "Beiträge zur Anthropologie des Chinesischen Volkes. I Über die verkrüppelten Füße der Chinesinnen. Kapitel I" "Japanese Journal of Medical Science" I Anatomy, vol. 8, No. 3, pp. 179-191, 1941.

Ploss, H. H., Bartels, M. & Bartels, P. "Woman" Vol. 1, pp. 260-272, William Heinemann, 1935.

杉江善夫「中国婦人（南京及其附近）の産科婦人科学的研究」『同仁会医学雑誌』14巻9号, 679-704頁, 1940.

鈴木良平「足の外科」52-55頁, 金原出版,

1976.

高木憲次・斎藤良俊「Shaouchio（纏足）に就て」『診断と治療』13巻1号, 53-56頁, 1926.

角田秀雄「台湾婦人ノ骨盤ニ就テ並ニ生体計測」『産科婦人科学雑誌』7巻2号, 57-98頁, 1905.

Wulfen, Erich "Sexual verbreeher" (井上泰宏訳「犯罰と性」(世界性学全集18) 241-249頁, 河出書房, 1958)

新刊紹介

志賀市子著

『中国のこっくりさん－扶鸞信仰と華人社会－』

本書は、著者の学位論文『近代中国のシャーマニズムと道教』（1999年 勉誠社）を一般向けに書き下ろした一書といえるが、その後の発表論文や資料を縦横にちりばめた内容の濃い好著となっている。題名は、誰でも小学校などで一度は経験したことのある、紙の上に鳥居の絵などを描き、五十音などを描き、こっくりさんと呼ばれる神霊を呼び出して、指で押さえた十円玉などが自動書記する遊びである。しかし、中には共振する子もいて、霊的な不思議な世界と思われていた。著者は、この自動書記に特徴をもつ、中国の扶鸞信仰に焦点をあてて、その歴史と現在社会における意義を論じる。

構成は、はじめに 第1章 扶鸞とは 1扶鸞の方法 2扶鸞の原理, 第2章 香港の道壇と扶鸞信仰 1扶鸞との出会い 2香港の道壇 3道壇の信徒たち 4呂祖の弟子となる 第3章 1扶鸞儀礼の変遷 2扶鸞信仰の諸相 3扶鸞信仰と基層社会 第4章 1清末の扶鸞結社運動 2民国期の新宗教運動 3霊学会と近代上海の心靈主義 第5章 1台湾の扶鸞結社 2東南アジアの扶鸞結社 3中国本土に復活する扶鸞 おわりに 巻末に、主要参考文献 あとがき となっている。アジアブックスというシリーズ本の一巻ではあるが、構成から見るとおり、本格的な学術書の解説版といった趣のある重厚な内容である。

中国のこっくり信仰, 扶鸞信仰は一般的に乩手, 正鸞と呼ばれる人物が柳や桃の枝で作られたT字やY字型をした乩筆を持ち, 神

霊が降りると砂や灰を敷いた盤の上に漢字や記号などが描き出され, それを自らや傍らの者が読み上げ, 書記が書き記す。行われる場所も廟や宗教結社はむろん, 自宅から役所, 書院のような公的な場までさまざまであった。

著者は中国人がなぜ扶鸞儀礼の虜になるのかを確かめるために香港の道教団体, 信善紫闕玄觀を中心に綿密なフィールドワークを試みる。紫闕玄觀との出会いから, 自らの入道し呂祖（呂洞賓）の弟子となり, 扶鸞儀礼を体験するなど, 読者を自身の調査研究課程と同行させながら扶鸞の世界を案内していく。「扶鸞信仰の成立は, 中国の人々の, 漢字に対するほとんど宗教的と言ってもよい尊崇の念と深く関わっている」ことから扶鸞が知識人の間にも受容され, 時代状況を反映した扶鸞結社運動が高まりを見せることになる。著者は清末, 民国期, 1950~70年代と時代を分け, 香港・台湾での扶鸞結社の活動を善書分析からその内容にまで踏み込む。

いずれにせよ, 紫姑神信仰のシャーマニズムに起源する扶鸞の歴史, 近代民衆史と扶鸞結社運動との関係, 中国少数民族・東南アジアの扶鸞信仰まで言及した本書は扶鸞信仰を総観する入門書といえるが, 一行一行に込められた意味は, 『近代中国のシャーマニズムと道教』を踏まえてだけに充実している。一読をお勧めしたい。

(佐野賢治)

B5判 253頁 大修館書店 2003年11月刊